



👁️👁️ みどころ

森喜朗元東京五輪・パラリンピック組織委員会会長の“女性差別発言”を契機として、“ジェンダー論”が加速しているが、プロ野球への女性参入の是非は？

『ドカベン』や『アブサン』で有名な水島新司には『野球狂の詩』もある。左のサイドスロー・水原勇気は、9回2アウト2ストライクからの「1球限定」のストッパーとして大活躍。また、「ナックル姫」こと吉田えり投手の“関西独立リーグ”での活躍も現実だ。

しかし、今なぜ韓国で“スポ根少女モノ”の本作がヒット？学術論文もしっかり読み込みながら、その“論点”を整理すると共に、134km/hの豪速球から「ナックル姫」への転換を目指すヒロインのひたむきな姿に拍手！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■なぜ今韓国にこんなスポ根映画が？ジェンダーの流れ？■□■

本作は、英題が『Baseball Girl』なら、邦題も『野球少女』。チラシには、「あきらめない。何があっても。」「プロになる夢をあきらめない<天才野球少女> 一人のコーチと出会い、彼女は突き進む——。」と書いてある。したがって、本作はどう見ても、高度経済成長期の日本で大流行した“スポ根もの”だ。しかし、「頑張り！頑張り！」が美德であり、「大きいことはいいことだ」だった時代は既に終わり、今や“個性の尊重”、“ジェンダー尊重”の時代だから、「あきらめない。何があっても。」などとやたらに根性に訴えるとヤバイのでは？もし、そんな指導のために怪我をしたり、希望が叶わなかった時の心のケアはどうするの・・・？

日本でも、かつて本作と全く同じテイストのマンガと映画があった。それは、ズバリ、水島新司のマンガ『野球狂の詩』の主人公、水原勇気だ。今からちょうど50年前の19

72年に始まった同作は、彼の『ドカベン』や『アブサン』と共に、私たち団塊世代の男たちに愛読された。しかし、今ドキの日本には、こんな“スポ根少女マンガ”がヒットする土壤はないはずだ。しかるに、なぜ今韓国で『野球狂の詩』と全く同じテイストの、本作のような映画が作られ、ヒットしたの？

本作でチュ・スイン役を演じたイ・ジュユンはかなりの美人で、その点では水原勇気と共通項があるが、そんな(いやらしい?)目で見るのは、私たち団塊世代のじいさんだけ？韓国で本作が大ヒットしたのは、若い人が本作に共感したためだろうから、その要因をしっかりと考えたい。ちなみに、アンダースローの左投手だった水原勇希は、「医学上女性が支配下選手として登録できない」という当時の野球協約を乗り越えて、1975年に東京メッツで女性ではじめて指名され、入団できたが、さて、高校卒業を控えたスインは？

■□■最速134km/hは女ではすごい！しかし男では？■□■

日本の高校野球では、高野連(公益財団法人日本高等学校野球連盟)の「大会参加者資格規定」第5条が、「参加選手の資格」は「その学校に在学する男子生徒で・・・」と定めている。しかし、本作を観る限り、スインは高校野球部の部員の1人として青春のすべてを野球に捧げてきたし、今はプロ野球選手を夢見ているようだ。しかし、韓国ではそんなことが可能な？他方、スインは最速134km/hを誇っていたが、それは女ではすごいものの、男では普通。打ちごろのストレートになってしまうレベルだから、その方面でもどうなの・・・？

日本には、「独立リーグ」を中心に活躍した吉田えりがいる。右のサイドスローだった彼女のストレートは最速101km/hだったから、それに比べると、スインのストレートはまさに豪速球！しかし、プロで通用するためには、150km/hのストレートが不可欠だ。そう考えたスインは1人で黙々とそのための練習を続けたが、そこに登場したコーチのチェ・ジンテ(イ・ジュニョク)が、まったく違う発想からアドバイスするのが本作のポイントだ。

私は故・野村克也監督の野球理論を高く評価しているが、彼は「その投手にしかないボールがあれば、ワンポイントとしてなら通用するかもしれない」と水原勇気を評価したらしい。そんなアドバイスもあって(?)、水原勇気はドリームボールという“決め球”を極め、ストッパーとして、各試合の9回2アウト2ストライクからの1球限定という役割を与えられ、それなりの成績を修めているから立派なものだ。また、「ナックル姫」と呼ばれた吉田えりも、101km/hのストレートと80km/h代のナックルの組み合わせで勝負し、関西独立リーグのみならず、米国独立リーグにも出場したのだから、こちらも立派なものだ。

そう考えると、スインも最速134km/hの豪速球を“長所”と考えるのではなく、水原勇気や吉田えりのような“別の道”を模索するべきでは？そこでジンテがアドバイスしたのは、「お前の長所は回転数の高い球を投げられること」。そして、ジンテからスインへの

指示は、その長所を生かせるナックルボールの習得だったが・・・？

■性差別とは？森発言の当否は？その議論は花盛りだが・・・■

東京五輪・パラリンピック組織委員会会長だった森喜朗氏のいわゆる“女性蔑視発言”を巡る議論と情勢の展開は周知のとおりだが、各種スポーツにおける男女別競技の是非、在り方を考えると、その根は深い。サッカー、バレー、バスケットボール等、多くの団体競技はすべて男女別に分けられているが、野球は男子野球と呼ばれることもなく、男子のみに限定するのが当然とされている。それはなぜ？その当否は？

そんな視点で、文献を調査したところ、近藤良享（中京大学）の「スポーツ・ルールにおける平等と公正～男女別競技からハンディキャップ競技へ～」を発見した。同論文は、「近代オリンピック夏季大会の男女競技数（含、混合）の変遷」を中心に、①「男女別競技の過去と現在」、②「ジェンダー・フリー（gender free）のスポーツ世界へ」等を分析している。また、来田享子（中京大学）の「スポーツは性を分けて協議する必要があるか」や、山口理恵子（城西大学経営学部准教授）・野口亜弥（順天堂大学スポーツ健康科学部助手、女性スポーツ研究センター研究員）の「渋谷からガラスの壁を壊そう スポーツとジェンダーの平等」を読んでも、さまざまな視点があることがよくわかる。なるほど、なるほど。そんなテーマに興味のある人は、これらの学術論文をさらに研究してもらいたい。

ちなみに、同性どうしの結婚が認められないのは「婚姻の自由」などを保障した憲法に反するとして、北海道の同性カップル3組が国に損害賠償を求めた訴訟の判決で、札幌地裁（支部知子裁判長）は3月17日、「婚姻で生じる法的効果の一部すら受けられないのは差別だ」と述べ、同性婚を認めない民法や戸籍法の規定が法の下での平等を定めた憲法14条に違反するとの初決断を示した。こんな判決の登場は、“ジェンダー論”とスインの夢、さらなる追い風に・・・？

■トライアウトへの挑戦は？新庄はダメだったが・・・■

毎年1月に実施されるプロ野球のドラフト会議では、社会人野球、大学野球、高校野球のスター選手たちがスポットライトを浴びる。阪神タイガースが4球団競合の末にドラフト1位で引き当てた近畿大学のスラッガー・佐藤輝明選手は、3月18日の時点でオープン戦ながらホームランを6本も放って期待通り（期待以上？）の大活躍を見せている。

ドラフトに対して、「トライアウト」を関係者以外が興味を持って見ることはあり得ないが、2020年12月の12球団合同トライアウト（神宮）に、元阪神タイガースの新庄剛志選手が参加したことには全マスコミが目撃した。それと同じように（？）、本作後半はジнтеが人脈を駆使してスインのトライアウトを目指すストーリーになり、そこにマスコミの注目が集まることに。さあ、スインはトライアウトを受けることができるの？残念ながら新庄選手はダメだったが、さてスインは・・・？

ドラフト会議は、脚光を浴びたスター選手たちをスカウトや球団がどう評価するかがテーマ。しかし、トライアウトは、バッターなら一打席勝負、ピッチャーなら一打者勝負が

基本だから、まさに“一発勝負”。結果が出るか出ないかにすべてがかかっている。そのうえ、たとえ結果が出て、総合的にその選手をどう評価するかは球団側に委ねられているから、圧倒的に選手側の立場は弱い。しかし、スインがある打者に対して投げたナックルの威力は？さらにスインの投げた球に興味を示した監督が、次の対戦相手として指名した打者とスインとの真剣勝負は？

■□■契約金は6000万ウォン！それをどう評価？■□■

トライアウトでタイムリーヒットを放つという見事なパフォーマンスを見せたにもかかわらず、どの球団からもオファーがなかった新庄選手は、「身の程を知りました」と述べて、きっぱり現役復帰を断念した。それに対して、トライアウトを終えたスインに対しては球団社長室へのお呼びがかかったから、こりゃ朗報！そう思ったのは当然だが、そこでスインに対して示された条件は、球団の事務職員としての採用だったからスインは敢然と拒否。ああ、やっぱり、所詮女はプロ野球では無理！そう思っていると、本作ラストでは状況が一転し、スインとジнте、そして母親を交えた席で球団側から契約金6000万ウォンの条件が打診されるから、それに注目！

今はすっかりスインの応援側に回っている母親は、6000万ウォンと聞き「今すぐには払えないが、半年待ってくれば払います」と答えていたからアレレ……。それに対して、「いやいや、お母さん。そうではなく、契約金とは……」と説明したのはジнтеだ。6000万ウォンは約600万円だから、ジнтеは「良い条件ですよ」と語っていたが、さて、その当否は？

ちなみに、日本プロ野球界の年俸最高額は昨年までは巨人・菅野智之の8億円だったが、今年は米大リーグ・ヤンキースから楽天へ8年ぶりに復帰した田中将大投手の9億円がトップになった。もちろん、それに比べるのはナンセンスだが、女性初となるプロ野球選手の契約金6000万ウォン（約600万円）をどう評価すればいいの？

2021（令和3）年3月18日記